# リリカルなのはStrikerS～罪を背負いし者～

ムジカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～罪を背負いし者～

【Ｎコード】
Ｎ０４１５Ｔ

【作者名】
ムジカ

【あらすじ】
以前、管理していたサイトで執筆していたリリカルなのはの二次小説です。矛盾点や表現を直しながら投稿していくので、既読の方も宜しければ読んで下さい。

## プロローグ（前書き）

処女作品の修正版です。感想待ってます。

# プロローグ

とある管理外世界

大自然と言うには生易しいその荒れた大地に、廃れた建物が立ち並ぶ集落があった。

そこに居たのはたった三人。一人は威厳のありそうな老人、一人は頭髪が全て白髪の少年、そしてもう一人、少年に抱きかかえられていた少女だ。

だが、その少女はその体を血で染めていた。

「違う……違うんだ」

少年は泣いていた。

「守られていたのは俺の方なんだ」

冷たくなった少女を抱いて泣いていた。

「俺はただお前と一緒に居たかっただけなのに」

少年は自分を憎んだ。

「なのに……何で！！」

少女を守るはずの力が少女を死なせたことを。

泣き崩れる少年を前に老人はこの世の残酷さを嘆き、己の無力さを恨んだ。

リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～罪を背負いし者～始まります。

## プロローグ（後書き）

ストーリーやキャラの設定及び構成は思い付くのにそれを文章化する才能が無い為、タメゲーならぬタメ小説が増えているこの頃。

誰か文才を分けてくれー！

## 第一話（前書き）

以前書いたのを改めて見ると、少し恥ずかしいです。

これからも宜しくお願いします。

# 第一話

～とある一室～

そこには一人の老人が高級そうな椅子に座っている。

コンコン

「入れ」

ノックに答える老人の野太い声。

ガチャッ

「何か御用ですか、ラルゴ元師？」

部屋に入って来たのは、二十歳前後の少年だった。顔は整っており、街を歩いていれば大抵の女性は振り返るレベルだ。

ただし、年齢にしては髪の毛が白すぎる。

「ああ、お前さんに配属命令だ」

ラルゴと呼ばれた老人は少年に指令書を渡す。

「配属？どこにですか？」

「機動六課だ」

その言葉に一瞬だが少年は反応する。

「……確か貴方が秘密裏に後援している部隊ですね」

「そうだ、お前さんにはそこで彼女達に協力してもらいたい。もちろんお前流で構わない。良いかね、スパーダ特務官？」

「了解しました。スパーダ・トラディメント特務官、命令を実行します」

スパーダと呼ばれた少年は敬礼と共に命令を受諾した。

「よろしい、早速で悪いがレリックとガジェットが見つかったらしい。六課にも連絡したが、ここからなら君の方が近いので、先に行ってレリックを確保して来い」

「了解しました。では、失礼します」

そう言ってスパーダは部屋を出た。そのスパーダの後ろ姿を見るラルゴの眼は何処か儚げだった。

～レールトレイン～

「さてと」

先程の会話から暫く経ち、スパーダは今列車の中にいる。

「ついついガジェットを壊してしまったが、何体かは六課に残しておいた方が良いかな？」

スパーダは今レリックのある車両に居り、そこでは?型のガジェットが壊れている。因みに、彼のバリアジャッケットは、フードの付いた黒いロングコートである。

ドッゴーン！！

「ん？」

突如外から聞こえてきた爆音にスパーダは意識を向ける。彼にしてみれば想定内の事だったので大して驚いていない。

「来たか」

スパーダはセットアップしていた籠手型のマモンを解き、銃型のベルフェとアスモを構えた。列車内からも爆音が聞こえスパーダの居る車両のドアが開き、二人の管理局員が入って来た。

（大きくなったな）

その内の一人のオレンジの髪をしたツインテールの女の子を彼は知っている。例え少女は知らなくとも彼にとってその少女は忘れられない人だから。

～六課ｓｉｄｅ～

六課での最初の任務、スバル・ナカジマとティアナ・ランスターは共にガジェット?型を破壊した後、ガジェットとは違う反応があった車両に侵入した。

すると、そこには壊れていた?型とフードの付いた黒いコートを着

た男が立っていた。

（どういうこと？）

破壊されたガジェットを見るとまるで鋭い刃物で切られた後がある。それがティアナには信じられなかった。

（あの人の持っている武器は私と同じ銃型デバイスなのに）

そう彼女は知らない、スパーダがマモンの能力使って指先から放出した魔力を圧縮、硬化してＡＭＦで魔力が消される前に敵を切り裂いたのを。

（あれは！？）

だが今の彼女にとって重要なのは、その人物が脇に挟んでいるケースの方だ。

（もしかして、レリック！？）

自分の所属する機動六課にとって最も重要なモノをその男が持っていた。

（ガジェットを破壊したこの人が敵かはわからないけど、ここには六課の隊員しか来ないはずだから……）

ティアナは少し考えた後、相方に念話を送り軽い打ち合わせをして男に銃を向けて警告する。

「時空管理局です。大人しく此方の指示に従えば、貴方には弁明の

余地が有ります。武器を下ろして投降して下さい」

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

この車両に入って来た局員の台詞にスパーダは少し驚いた。

（今の台詞を聞くかぎりだと彼女達にとって俺は不審者の様だな、もしかして未だ本局から俺のことが伝わって無いのか？……まったく相変わらず連携が悪い）

などと本局と地上の仲の悪さに愚痴りながらも彼は何かを思い付く。

（折角だし……少し遊ぶか）

すると、彼は右手に持った金色の銃、ベルフェゴールを彼女達に向ける。

「貴方、自分が何をしているのか分かっているのですか？」

管理局である自分達に敵対しようとしているスパーダに対してティアナは少し強い口調で警告する。

「ククッ」

そのティアナの言葉を聞いて笑い出すスパーダ。

「何がおかしいんですか？」

笑われた事に腹が立ったのか、ティアナの声が強くなる。

「お前達こそ分かっているのか？戦場で相手に武器を向けるという事は自分も撃たれる覚悟あるという事だが、お前達にその覚悟があるのか？」

「当たり前です！」

管理局の一員であるという自負心から強めに言い返すティアナ。

「口では何とでも言えるがな。まぁいい、試してみよう」

「スバル来るわよ！」

「うん！」

敵の攻撃に備える彼女達。

――だが次の瞬間……

「ほらよ」

スパーダは持っていたケースをティアナたちに投げつける。

「「なっ！！」」

ケースに気を取られている二人をスパーダは見逃さなかった。

「隙有り」

スパーダは左手に持っていた赤色の銃、アスモデウスも構えて二つの銃の引き金を引く。

ドンドン！

二人はとっさに物陰に隠れ、その間にスパーダは……

「ピオッジャ・デラ・コンピクシェンザ」

アスモの銃口を散弾銃に換え、天井に向かって弾丸を射った。

ドォーン！

「「！？」」

ガジェットを破壊し、フリードによって列車の上に乗ったエリオ・モンディアンルとキャロ・ル・ルシエはティアナ達が向かった方から爆音が聞こえた方を向き、そこから出て来たスパーダに警戒した。

「こっちにもいるのか」

それに遅れて列車の中からティアナとスバルが出てきた。二人は直ぐ様エリオとキャロと合流し、態勢を整える。

「皆行くわよ！」

「「「了解！！」」」

ティアナの呼びかけに応えるＦＷ陣たち。

（新人だけならスキルは使うまでも無いか）

スパーダがそう考えているとスバルがスパーダに向かって来た。

「うぉぉ！」

勢いよく拳を突き出すスバル。

だが、スパーダはそれを軽く受け流し、ベルフェゴールで射とうとすると、今度はエリオがソニックムーブで仕掛けてきた。

「はぁぁ！」

（早いな……だが！）

エリオが攻撃する瞬間、スパーダは体を少しだけ反らし攻撃を避けた。

（早いのは移動速度だけで攻撃速度は普通と変わらないな。恐らくは未だ第一段階か…）

「な！？」

「テンポラレ・デラ・ピグリッジア」

スパーダは避けた後テイァナとキャロに銃口を連射弾に切り換えたベルフェゴールで牽制をし、エリオを蹴り上げ、ＦＷ陣達との距離を取る。

「まだまだっ……！？」

何かを感じたスパーダは突如後ろを振り向く。

（……思ったより早かったな。いや、流石と言うべきか？）

そこには空にいたガジェットを破壊した六課の隊長二人が揃って目の前にいた。

「武器を下ろして投降して下さい」

「これ以上は貴方を公務執行妨害で逮捕します」

その二人とは管理局の“白い悪魔”こと高町なのはと“金色の閃光”ことフェイト・テスタロッサ・ハラオウンその人だ。

## 第二話

ＦＷ陣を追い詰めていたスパーダだが、上空のガジェットを片付けた二人の隊長、高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウンが現れた事で状況が変わった。

（エースが二人か、これはスキルを使った方が良いかな？）

スパーダが冷静に状況を分析していると……

『俺は嫌だよ』

スパーダの腕輪の宝石の一つが光り、そこから気だるそうに言う男性の念話が届いた。

『何よベルフェゴール。あんた、主に逆らう気？』

それを叱責するかの様に今度は違う宝石から女性の声がする。

『別にそんなんじゃないよ、アスモデウス。こんな無意味な戦い、面倒なだけさ』

『何ですって？』

依然面倒くさがっているベルフェゴールに対し、アスモデウスが怒りを露にする。

『お前等、戦闘中に喧嘩するな。別にベルフェゴールのスキルが無くてもいける』

正直頭の中で喧嘩されるのは勘弁願いたいと思ったスパーダは早々に会話を切り上げるべく打開案を提示する。

『それはそれで寂しい』

『アンタ本当に何がしたいのよ！？』

『まぁ戦う以外の方法もあるしな。同じ管理局だし』

などと念話で会話をしていると……

「繰り返します武器を下ろして下さい」

“白い悪魔”こと、高町なのはが再度警告する。しかもご丁寧にデバイスを突き付けてきた。

「何故だ？」

「何故って貴方は公務執行妨害を犯したのですよ！？」

“金色の閃光”ことフェイト・T・ハラオウンは管理局である自分達に対してのスパーダの不遜な態度にやや驚いている。

「執務官なのに俺を知らないのか。まぁ会ったことも無いし無理ないか」

「「何を言って……」」

二人ともスパーダの言っている事が理解出来ないでいると……

ピピッ！

突然通信が入って来た。

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

「「はやて（ちゃん）！どうしたの？」」

モニターに移っている少女は“最後の夜天の主”こと八神はやて。二人にとって十年来の大切な友人だ。

「今そっちに特務官の人いてない？」

「特務官って……まさか！？」

「そうだ」

スパーダは被っていたフードをとった。

「俺がスパーダ・トラディメント特務官だ」

そこに現れたのは顔の上半分を近代的な仮面で隠した白髪の男性の顔があった。

「貴方が特務官、ということは……」

「そうだ、俺がしていたのは公務執行妨害では無い。強いて言うなら新設部隊の腕試しと言ったところか」

その場いた六課の隊員は驚きで言葉を失った。

～機動六課部隊長室～

今この部屋には列車にいたメンバーの他に八神家の面々と整備士のシャリオ・フィニーノことシャーリーがいる。

「では改めまして、八神はやて二佐です」

「スパーダ・トラディメント特務官だ」

現在のスパーダは黒いコートの様な制服を着ている、因みに仮面はつけたままだ。どうやらこれが特務官の正装の様だ。

「今回は連絡の不手際があって申し上げございません」

スパーダに対し深々と頭を下げ謝罪の意を述べるはやてだが、スパーダは大して気にしていない様子だ。

「別に、上の連中の不仲は今に始まったことじゃない」

やや自嘲気味に言うスパーダに周りは苦笑いする、というか内容が内容だけにするしかない。

「それに大して攻撃もくらって無いしな」

大してどころかスパーダは無傷だった。四人がかりでこの結果に新人達は少し落ち込んでいる。

「スパーダ特務官の魔導師ランクが書いてなんやけど、これは特務

官やから？」

「ああ、そうだ」

「そのマスクも？」

「ええ」

“特務官”その言葉が六課隊員には馴染まない。

「はやて、特務官って一体何なんだ？」

ヴィータがその部屋にいる全員の疑問を口にする。

「えっと、うちも詳しいことはわからんのやけど…」

「俺が説明しよう」

困っているはやてにスパーダが助け船を出し説明を始める。

「特務官というのは上層部に任命された上層部直属の局員だ」

「上層部の？」

上層部と聞き、畏まるヴィータ。

「そうだ、そして特務官には様々な権限が与えられる。その内の一つが単独行動権だ」

「単独行動権？」

「簡単に言うと俺の行動は指揮系統や階級に左右され無い。つまり俺はワン・マン・オフィサー、たった一人の管理局ということだ」

「それはうちの命令には従わんということ？」

はやてのその言葉に室内に緊張が走る。単独行動権とは要するに好き勝手が出来るという事だ。それは組織に属している人間とっては規律を乱しかねない存在だ。

「いや、基本的には従わせてもらうがケース・バイ・ケースといったところかな」

それを聞いてはやては少し安心した顔をする。

「さて、堅苦しい話はここまで。書類に因ると同い年なんやし、うちのことは名前で呼んでもらってええよ」

「「あっ、私も」」

などと隊長陣が親しく接しようとするが……

「いや、結構だ。俺は人と必要以上に親しくなるつもりは無い。だから、その提案は丁重にお断りさせてもらう」

スパーダはそれを拒絶した。

「えっ、でもうちらは仲間になるんやし、その方が良いんと違う？」

「……俺はお前達と仲間などになるつもりは無い」

どうやらスパーダはあくまで拒絶するつもりらしい。

「どういう意味だ？」

スパーダの言葉にシグナムが強く反応する。彼女の騎士としては当然かもしれない。

「俺とお前達の関係はただ単に職場が同じだけの局員同士ということだ。それ以上でも、それ以下でもない」

「へっ、特務官様にとって仲間は上層部のお偉いさんで私等一般局員は眼中に無いってか？」

はやてを愚弄されたと思ってか、今度はヴィータが突っかかる。

「それは違うな。俺と上層部の関係はそういうものじゃない」

「ではどういう関係なんですか？」

「ティア？」

相方の意外な突っ込みに驚くスバル。どうやらティアナは先刻の事をまだ根に持っているようだ。

「そうだな……簡単に言うなら互いが互いを利用しあう関係だな」

「利用しあう？」

あまり好意的でない単語に眉を顰めるシャマル。

「そうだ、上層部は俺を信用して無いが、連中にとって俺の力は手放し難いからな。そして俺も連中は信用して無いが、特権は便利だと考えた。だから特務官になることを受け入れた」

「そんな……それじゃ貴方は一体何を信じているの？」

自分達とは明らかに異なるスパーダに驚くなのは。

「自分だ、俺が信じるのは自分ただ一人だ。それ以外の人間は信用しない」

その言葉に六課の隊員は言葉を失った。

「まっ、理解出来ないのも無理無いな。話が終わりなら俺は自室に行かせもらうぞ」

「あっ、ちょっと待って下さい」

勇気を振り絞って声を出したのはシャーリーだ。

「何だ？」

「今後の調整とかのためにトラディメントさんのデバイスのデータを取りたいですけど」

「俺のデバイスには調整は不要だから結構だ」

「えっ？でも…」

「良いって言ってんだろ、このドカスが！！」
突然スパーダの腕輪から怒声が聞こえた。
「おい、うっせぇぞサタン。この短気ヤロウ」
サタンの怒声にレヴィアタンが叱責する。
「ほんとよねぇ。貴方、ストレスは肌に良く無いわよ？」
それに賛同する様にアスモデウスが呆れ口調に言う。
「おいおいアスモデウス、俺たちに肌なんて関係無いだろう？……ったく面倒な事に成っちまった。おい女、お前のせいだぞ」
面倒くさがり屋のベルフェゴールが事の発端のシャーリーを責める。
「まぁ落ち着け、ワシはその仕事に対する熱意は嫌いじゃ無いがのぅ」
老人の様な声のマモンがシャーリーを庇う様な発言をすると……
「マモン、貴様は良いかも知れんが、この私が只の人間風情に触られてたまるか」
「別に良いだろルシファー、いちいち人間の言う事気にすんなよ」
高飛車な態度を取るルシファーに対し、我関せずといった立場をとるベルゼブブに……

「うっせぇベルゼブブ、手前も黙ってろ！！」

再びサタンがきれる。

そんなやりとりが行われている間、六課のメンバーは唖然としていた。

「あ～……お前達、周りがついてこられて無いぞ」

更に別の声が聞こえた。

「えっと…これは」

「あー済まん、ウチのデバイス達が勝手に喋りだして」

「デバイス…達？」

あまりに驚いたのか未だ状況が理解できていないシャーリー。

「ああ、この腕輪にある七つの宝石一つ一つが独立したデバイスでな、ＡＩも別々となっている」

「つまり、トラディメントさんにはデバイスが七つあるということですか？」

「まあそういう事だ、そしてそれら全てを統制し、調整するのが腕輪の本体であるゲヘナだ」

「だから調整が要らないと？」

「理解が速くて助かる。じゃあ俺行かせもらうぞ」

そう言ってスパーダは部隊長室を出た。

## 第二話（後書き）

感想待ってます。

## 第三話（前書き）

イタリア語って難しいですね。
誰か良い翻訳サイトご存知でしたら教えて下さい。

## 第三話

「気にいらなぇな、アイツ」

どうやらヴィータはよほどスパーダの態度が気に入らなかったらしい。主を第一に考えている彼女にしてみれば当然ともいえるが。

「まぁ、確に好感は持てないな」

それに同意するシグナム。将である分、彼女の方が不快感は強いかもしれない。

「う～ん、それにしても彼の個人情報殆んど不明やな」

改めてスパーダの個人データを閲覧しながら考えている。

「レアスキル持ちみたいだから余計にね」

（レアスキル…）

（ティア…）

レアスキルという言葉を聞いてどこか落ち込んでいる相方を心配そうに見つめるスバル。

ピピッ

そんな時、突然はやてに通信が入った。

「やぁ、はやて」

そこに現れたのは彼女たちにとって大事な仲間であり管理局の提督、クロノ・ハラオウン。

「クロノ君、どないしたん？」

「いや、スパーダの奴が六課に配属されたって聞いてね」

「お兄ちゃん、彼のこと知ってるの？」

自分の兄が彼を知っている事に驚くフェイト。

「まぁな、無器用で感じは悪いが根は良い奴だから、それに（君達なら）・・・」

何やら思い耽っているクロノ。

「どうしたの、クロノ君？」

「いや、何でも無い。まっ、彼を宜しく頼むよ」

ピッ

通信が終わり、初めて提督を見た新人たちは緊張からようやく解放された様な顔をしている。

～スパーダの部屋～

スパーダは部屋に入ると仮面を外し、椅子に腰をかける。

「ふぅ」

ピピッ

そんなスパーダにプライベート通信が入ってきた。通信相手を見たスパーダは仮面を着ける事無くそのまま通信を開く。

「はい」

「どうだ、機動六課は？」

「別に、特に問題は無いですよ元帥」

通信の相手はラルゴ元帥だった。

「そうか。……そういえばお前さん素顔は久しぶりに見たな」

仮面を外したスパーダの顔は整った顔立ちをしている。恐らく女性なら誰もが振り返るだろう。

「流石に自室の中までもつけませんよ」

「それもそうだな。しかし、早いものだな……あれからもう十年か」

「そうですね。拾って下さった事は感謝しています」

「私は当たり前の事をしたまでだ。それより、お前さんが心配だ」

「大丈夫ですよ、こいつと契約したのも自分で選んだ事ですから」

そう言いながらゲヘナに自分のデバイスに手を当てるスパーダ。

「そうか、なら構わない。だが気を付けろよ、カリムの予言が当たれば今回の事件、何かがある」

「分かりました気を付けます」

ピッ

そう言ってスパーダは通信を切った。

「予言か……」

スパーダは先程ラルゴから送られてきたカリムの予言の内容に目を通し、内ポッケからタバコを取り出し、吸い始めた。本来、六課は禁煙なのだが、窓を開けたからいいだろ、と言わんばかりに堂々と吸っているその姿はふてぶてしいの一言だ。

「カリムの予言は当たる方だからなぁ」

そこにはこう記されていた。

～古き結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の元聖地より翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ地上の法の塔は焼け落ち、それに先駆け数多の海を守る法の船も砕け落ちる～

「これを俺にどうにかしろって事か？」

スパーダは溜め息交じりに煙を吐いた。

「信用されているのだろ？」

ゲヘナが皮肉を込めてスパーダを茶化す。

「ふん、良く言う」

「何れにせよお前のやる事は変わらない」

「分かっている、例え全ての人間を敵にまわしても約束は守るさ、契約だからな」

「なら良い」

そう、彼らには契約がある。力を手に入れた代わりに果たせねばならない契約が……

翌日

スパーダは六課の朝練を見学していた。

「あっ、スパーダ…君？」

見学をしているスパーダに声を掛けえるなのは。

「何故、疑問形なんだ？」

「だって名前で呼ばれるの嫌かと思って」

「そっちが呼ぶには気にしない」

「良かった～。じゃあ相談なんだけど、うちのＦＷ陣と模擬戦してくれない？」

「構わない」

「本当！？じゃあ早速準備しよっか」

今、スパーダと新人達は六課の訓練場にいる設定は市街地戦のようだ。場外では隊長達が見学している。

「どっちが勝つと思う？」

「恐らくトラディメントだろう。昨日の戦いでは無傷だったらしいからな」

ヴィータの問いにシグナムが冷静に分析する。例え相手が誰でも私情をはさまず見る事が出来るのは将が将たる所以だ。

「私は勝てなくてもあの子達には良い経験にはなる思うけど……」

フェイトとしては勝敗云々よりＦＷの事を案じている。

一方、スパーダは……

「さて、誰でやろうかな？」

どのデバイスで戦うか考えていると……

「俺がやるよ。最近戦って無いし」

「そうだな、レヴィアタンでいくか」

『クリティカルヒットをくらった人はＯＵＴだからね？準備は良い？では、よーい始め！！』

合図が出た瞬間スパーダは建物の陰に隠れる。

「レヴィアタン、セットアップ」

スパーダは右手に狙撃銃を持ち、彼の周りには１２個のビットが浮いていた。

「スキル発動。１～５番は結界を展開、６～１２番は散開。なるべく早く終わらせる」

スパーダの命令と同時に各ビットが動き始めた。

～ＦＷ陣ｓｉｄｅ～

「いきなり隠れたわね」

「どうするティア？」

スバルは司令塔たる相方に支持を求める。

「とりあえず魔力反応を探るわ、皆は攻撃に警戒し…」

ドォーン、ドォーン

作戦会議中に突如響き渡る爆音。しかもそう遠くは無い。

「複数の魔力反応！？しかもいきなり！？」

不意を付かれ驚くエリオ。

ドォーン、ドォーン

「でも建物に当たっているだけど、こっちには全然当たっていませんよ？」

「この攻撃、無理やり煙を作る為に……っ！？皆、離れないで」

気が付けば訓練場の半分が粉塵に覆われていた。

「さてと……」

スパーダは今、自分のビットが作り出した結界の中で飛んで行った方のビットから送られている映像をみて状況を分析している。

「そろそろ行くか」

そう言いながらスパーダは自らの狙撃銃を構え行動に移る。

～訓練場外～

「オイオイ、一体どうなってんだ？」

「魔力反応攻撃が行われるまで魔力反応が全く感じられへんかった」

どうやらスパーダの戦い方に驚いている様だ。

「…これは！？」

「どうしたの、なのは？」

「スパーダ君の反応が……いきなり消えたの」

「何だって？」

「この訓練場にいれば反応とかはこのモニターに出るんだけど…」

「一体どうやって？」

「わかんない、もしかしたらそういうスキルかも」

「主はやて、奴の能力については何も分からないのですか？」

「分かっとるのは能力名がセッテ・ヴィジ・キャピタリちゅうことだけやね」

「う～ん、とりあえず今は見てるしかないか」

一方、訓練場では未だに爆音が響いていた。

「ティアどうする？」

「魔力反応が無いんじゃ探してようが無いわね」

状況を打破しきれず、少しイライラし始めるティアナ。

「じゃあ、どうしましょう？」
「魔力反応で探せても確実に姿が見えないのはあっちも一緒」
「なら煙が晴れた直後に奇襲が来るかもしれませんね」
「そうね」
しかし、彼等の予想は容易く裏切られた。
ビュン
「ギャッ」
「フリード！？」
銀色の魔力ビームがフリードを落とした。
「今の射撃、正確にフリードを狙い撃った？」
射撃の正確性に驚くティアナ。
「そんな、……一体どうやって？」
ピュンピュンピュン
今度は複数の方角から先程のより小さめの魔力ビームが襲ってきた。
「キャッ！？」

キャロが他の三人と離れた瞬間……

ビュン

先程フリードを落としたのと同じ攻撃がキャロを襲った。

# 第四話

～訓練場外～

この模擬戦をモニターで観察しているなのは達は新人たちのデータを取ると共にスパーダのデータも収集していた。

「今ので大方分かったね」

「うん、多分複数のビットで敵を翻弄、誘導して狙撃銃での狙い撃ちだね」

なのはの意見にフェイトも頷く。

「新人達も恐らくそこまでは理解出来ただろうな」

「けどよ不利だという事に変わりねぇな。相手はこっちの位置を把握出来きるけど自分達は相手が何処にいるか分からねぇからな」

「しかし、支援型のキャロを最初に落としたということは次狙うのは指揮官のティアナか？」

「せやね、こういう戦いは頭を潰すのが定石やけど、キャロの能力を警戒して最初に落としたんやろね」

「皆、大丈夫かしら？」

八神家のメンバーも戦況を見ながらそれぞれ意見を述べる。

そして、戦いは依然スパーダが有利の状態で続く。

「さて、次はティアナか」

未だ物陰に隠れているスパーダは状況をうかがいながら次のターゲットに的を絞る。

「彼女に精密射撃を使うのは複雑かい？」

「…レヴィアタン、お前何で嬉しそうなんだよ？」

笑いながら言うレヴィアタンを不快に思うスパーダ。

「別に。ただ、主にとってあの男の妹である彼女は罪の象徴みたいなものじゃないかなって思ってね」

「関係無いな。今は模擬戦中で、俺は戦う、それだけだ」

「なら、狙い撃とう」

「分かっているさ。結界解除と共に６～１２番はこっちに戻れ。上空から狙撃砲を撃つ」

スパーダの伝令と共に先程までＦＷ陣を襲っていたビットが突如撤退した。

「攻撃が止んだ！？」

「一体どうして？」

エリオとスバルは突然の事に理解が追いついていない。

「っ！？…二人とも上空に魔力反応！」

煙が晴れた後、三人が上空を見た時、スパーダはすでにライフルを構え、射撃体勢に入っていた。そしてスパーダと三人の間には４つのビットが陣を組んで浮いていた

「一体何を？」

「パロットラ・デラ・インヴィーディア」

スパーダが射った魔力ビームはビットを通過することによって突如大きくなりティアナを襲う。

「ふっ、防ぎきれ……きゃっ！？」

スパーダの予想外の攻撃にティアナは倒れた。

「今のはビームが大きく強化されたの？」

「お前達の司令塔は倒れた。さて、どうする？」

ゆっくりと地上に降りながら二人に問掛けるスパーダ。

「ティアがやられた以上、こっちには作戦らしい作戦は無い。エリオ、スピードで振り回して接近戦に持ち込むよ！」

「了解しました！」

二人はスピードを出してスパーダに向かった。

「1～4番は射撃で翻弄、5～8番は砲撃、9～12番は俺の所で迎撃しつつ防御に備えろ」

ビット達はスパーダの命令に従い各々飛び立つ。

「くっ！このビット素早い…けど、速さなら！」

エリオはソニックムーブを使いスパーダに突っ込んだ。

「もらった！」

エリオはストラーダを振り下ろし、スパーダに当たろうとした瞬間

……

ガキン！！

「えっ！？」

4つのビットが密集し盾となり、エリオの攻撃を阻んだ。

「槍兵のくせに剣士の真似事なんてするからだ。隙だらけだぞ」

ビュン

防御を解除したビットのビームがエリオを襲う。

ヒュン

「くっ！！何とか避けれた」
「ほらほら、どうし……ん？」
「ディバインバスター！！」
スバルがスパーダの不意をついて技を放つ。
「結界とシールド展開！」
ドッゴォーン
辺りに爆音が響き渡り、一面は爆煙に包まれる。
「やったの？」
「惜しかったな」
「えっ！？」
どうやらスパーダはビットで結界を発生させ、更にシールドをその前方に展開していたようだ。
「俺にもっと近づいていれば当てられたかもな」
「そっ、そんな！？」
「呆けている暇は無いぞ。１～４番、５～１０番配置につけ」
スパーダの命令で先程のように４つのビットがスパーダとスバルの

間に展開されたが、今度はスバルと４つのビットの間に更に６つのビットが展開された。

「まさか更に強力な魔力砲！？」

先程ティアナを襲った砲撃より強いのが来ると思うと、スバルの背筋が凍る。

「終わりだ」

「避けなきゃ」

スバルは全速力で回避しようとし、今いる大通りから建物の間に入ろうとした。

「悪く無い選択だ……普通ならな」

ビュン

スパーダが放った魔力ビームは４つのビットの陣を通った時、先程同様強化され……

バシュン

６つのビットの陣を通った時……

ヒュン

――曲がった。

「えっ！？」

ドォーン

「きゃっ！」

予想外の出来事に体が対応出来ず、スバルは撃墜された。

「さぁ、後はお前だけだ」

そしてスパーダは残るエリオに向かってそう言い放った。

# 第五話

驚嘆、彼女達がスパーダの戦い方を見て抱いた感情は、この言葉に尽きる。正直、スパーダの実力があそこまで凄いとは思ってもみなかった。

「すごいね、彼」

「うん、あれほどの数のビットを同時に、しかも予め組まれたプログラムに動かせているんじゃ無く、常にプログラムを書き換えて命令を出している」

「よほど高い演算処理能力がなきゃ、あんなん不可能や」

分析すればするほど明らかになるスパーダの戦闘能力の高さになのは達は驚いている。

「そういえば、スパーダの魔導士ランクってデータに書いてなかったけど部隊的に大丈夫かな？」

一部隊に保有できる戦力は限られている。一見出鱈目な戦力を抱えている六課も実はリミッターの制限等で誤魔化している。しかし、これ以上戦力が増えて良いものだろうかと言う不安がなのは達にはある。流石に地上本部といらぬ衝突は避けたい。

「それがな、特務官は基本的に指揮系統から外れているから、居ても居ないものとして判断するんでリミッターも付けんで良いそうや」

無茶苦茶だな。

苦笑いしながら語るはやてを見ながらそう思うなのは達だった。

「特務官って何でも有りだね」

「にゃはは。でも良かったね、はやてちゃん」

「せやな、隊長格の人材を何の制限も無く手に入れらたんは良かったなぁ。……けど、絶対地上のお偉いさんからなんか言われるわー」

そう言って少しはやてが落ち込んでいると……

「主、決着がつきました」

「え、ホンマに？」

「トラディメントが先程まで自身を守っていたビットで結界を張り、エリオを捕らえたようです」

今まで会話に参加せず模擬戦を観察していたザフィーラが詳細を伝える。

「そんな事まで出来んのかよ」

「すごいですぅ」

ヴィータやリインもスパーダには驚きを隠せない様だ。

「とりあえずＦＷ陣もスパーダ君もこっち来て」

なのはの号令と共に模擬戦が終了を迎えた。

「「「はい」」」

「了解した」

ここではやてがある事に気付く。

「なのはちゃん！いつの間に呼び捨てする仲に？」

余程驚いたのか、はやてがなのはに言い寄る。

「えっ、違うよ。こっちの呼び方は気にしないって言われたからそうしているだけ」

「何やつまらん」

色恋沙汰が大好物な十代女子としては何かあった方が面白いのか、少しむくれた顔をするはやて。

「そんなにつまらない戦いだったか」

「あっ、スパーダ」

なのはが振り返ると、そこには何事も無かった様に戻って来たスパーダと明らかに疲労している新人達がいる。

「だとすればそれは新人達のせいだな」

「「「…すみません」」」

列車のとき同様、全く歯が立たず落ち込むＦＷ陣。

「違うんよ、今のは別の話をしてたんよ」

「それよりトラディメント、先程のがお前の能力か？」

「そうだ。名をオッチ・ペル・グアルダーレという」

「セッテ・ヴィジ・キャピタリってやつじゃねぇのかよ？」

どうやら先程閲覧したデータと情報が食い違っている事にヴィータが食いつく。

「それは俺の能力の総称だ」

「総称？」

つまりこの男は複数のレアスキルを保有している事になる。

「やはり、その名の通り７つあるのか？」

「ほぉ、知っていたのか？セッテが７を意味するのを」

実は守護騎士の中でも博識なザフィーラが自分の能力名の意味の一部を知っている事にスパーダは少し関心している。

「じゃあ、スパーダ君はレアスキルを７つも持ってるの？」

（……７つも）

レアスキルが7つも有る、その事実は自分を凡人と称するティアナにとって耐え難い事実だった。

「いや、厳密には違う。俺は一度には一つの能力しか使えない。つまり、俺のスキルは7つで一つの能力なんだ。無理に複数使うと体に負担がかかる」

「もし、一度に全部使ったらどうなるんですか？」

恐る恐るスバルはスパーダに聞いてみる。

「…別に大したことは無いさ。死ぬだけだ」

「そんな！大したこと無いだなんて！死ぬんですよ！？」

いとも簡単に死ぬと言い切ったスパーダに信じられないといった様子でキャロは驚いている。確かに普通の感覚ならそうだろう。

だが、当の本人にとってはそうではない。

「俺にとって自分の命に大した価値は無い。そこら辺に転がっている石ころと同じだ」

「そんな事…」

あまりに自分の命を軽く見ているスパーダにフェイトは反論しようとするが、それは叶わなかった。

「あるさ。例え俺が今ここ死んでも世界には何の影響も無く、何事

も無かったように明日を迎える。命なんてそんなものだ」

「でも、死んだら悲しむ人はいるよ」

「それも所詮は自分の知っている命だけだ。現に俺達がこうして話間にも死んでいる命はある」

「でも、せめて自分の知ってる人の死は悲しんだり、何らかの影響があるじゃないですか？」

「そうだ！お前みたいな薄情者と一緒にするな」

余程気に障ったのか、ヴィータがスパーダに怒りを露にする。他の者もあまり快くも持っていない様子だ。

「お前達が言っているのは人間だけなんだな」

そう言ってスパーダは足下にいた蟻を指で摘み顔の高さまで持ち上げた。

「何をしてるですか？」

ティアナはスパーダのしている事が理解出来ないでいる。

「ちゃんと見てろよ」

突然、スパーダはその蟻をひねり潰した。言うまでも無いが、その蟻は死んだ。

「ほら死んだぞ。悲しいか？お前達の人生に関係するか？」

「何言ってんだお前、そんなわけ…」

「無いよな。所詮、人間は人間やそれに近い命にしか関心が無いのだから」

「でも、それは虫だろ？」

「そう思ってるのは人間の傲慢さだ。そもそも、俺達人間とこの虫に一体何の違いがある？肉体の大きさか？弐足歩行するか否かか？言葉を話すからか？人間の形をしていれば命は尊いのか？」

「それは…」

スパーダの言っている事になのはは言葉を詰まらせる。彼の言っている事は決して正しいとは言えないが、間違っているとも言えなかった。

「全ての命は等しい。そして、死は全ての命に等しい。これはこの世の事実だ。もっとも、それを一番理解していないのは人間だがな」

誰も何も言い返せ無かった。

「じゃあ、俺は先に失礼する。能力の反動で疲れているんだ」

そう言って立ち去ろうとするスパーダだが……

「一つなら大丈夫なんじゃ無いの？」

スパーダの先程と言っていることの矛盾にフェイトが気付く。そう、

確かに先程スパーダはそう言っていた。

「普通に使えばな。しかし、あれがレヴィの能力の本来の戦い方では無い」

「じゃあ本来の戦い方って？」

「各ビットから得た敵の情報を高速演算処理し、本人は動かず後方からの援護射撃。それが本来の戦い方だ。しかし、特務官である俺は一人で戦うことを強いられる。故に、さっきのような戦い方になる。だが、あの戦い方だと処理する情報が増えて脳疲労が半端無いんだ」

つまり彼は敢えて自分が不利な戦い方をしていた。それでもあの圧倒的な差、新人達には屈辱この上ないだろう。

「では、そういう訳で失礼する」

そう言い、スパーダはその場から去った。

〜シャワー屋〜

スパーダはあれから少し休んだ後、訓練が終わった六課の女性陣の使用が終わったので、現在シャワーを浴びている。因みに隣の個室にはエリオとフリードがいる。

「あっ…あの」

「何だ？」

「さっき僕の攻撃を受け止めたときの事なんですけど」

エリオは先程の模擬戦でスパーダに言われた事がまだ理解出来ないでいた。

「ああ、あれな」

「あれはどういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。お前は槍兵でありながら、戦い方や体の使い方は剣士のそれだ。あれではお前の武器は力を発揮できず、くすぶるだけだ」

「そうだったんですか」

余程ショックだったのかエリオは落ち込んでいる様な声を出す。

「まあ、別にお前だけの責任では無い。お前の周りの大人は誰もお前に槍兵の戦い方教えて無かったからな。現に騎士であるシグナム二尉もヴィータ三尉も槍は使わないしな」

「じゃっ、…じゃあ僕に槍兵の戦い方を教えてくれませんか？」

「…何だと？」

「強くなりたいんです。だからお願いします」

エリオは板の向こう側にいるスパーダに頭を下げる。例えそれがスパーダが見ていなくても。

シャッ

スパーダはカーテンを開け、体を拭き始める。

「お前達の訓練メニューは高町一尉によってギリギリの所で組まれている。そこに俺との訓練を組み込んだら支障が出るぞ」

「それでもっ！…あっ！？」

エリオがカーテンを開けた時スパーダは背を向けて腰にタオルを巻き、頭を拭いていて顔は隠れていたが、スパーダの背中は銃痕、刃物や猛獣に切り裂かれた傷痕、火傷などがあった。

「どうしたモンディアル三士、この傷だらけの体か？」

「あっ、いえ…」

違いますと言おうとしたが、驚きのあまり口が回らなかった。

「これは強さだけを求め、戦い続けた愚か者の成れの果てだ。それでもお前は強さを求めるか？守りたいものはあるか？」

「……はい」

静かに、だが力強く答えるエリオ。

「……いいだろう。体の使い方を教えるぐらいなら休憩時間や寝る前の時間を使えばなんとかなる」

「ありがとうございます！あ、あのっ…これからは兄さんって呼ん

でいいですか？」

「っ！？」

少し驚いた様子を見せるスパーダ。

「先程高町一尉にも言ったが俺の呼び方は好きにしていいぞ、モンディアル三士」

「じゃあ、僕のことはエリオって呼んでくれませんか？」

「断る」

今度は即答だった。

「お願いします」

「嫌だ」

「お願いします！！」

「うるさいぞ。こっちは頭が痛いんだ」

「いいって言うまで言い続けます」

「……わかったよエリオ、俺の負けだ」

そう言ってスパーダはエリオの頭を撫でた。顔を見上げたエリオにはスパーダの優しい目が見えたという。

「ありがとうございます兄さん！！」

（兄さん…か、そう呼ばれるのは何年ぶりかな）

その時、スパーダはある少女を思い出していた。

自分が守れなかった少女を

# 第六話

〜食堂〜

現在、食堂では女性陣が食事をとりながら会話をしている。

「大丈夫かな？エリオ」

エリオがあのスパーダと二人っきりという事にフェイトは少し不安がっているようだ。

「どうだろうな」

「ヴィータ、そないな事言わんの！」

「うっ……ごめん、はやて」

「あっ！来たみたいですよ」

「……何かエリオ嬉しそう」

食堂に来たスパーダ達は食べ物を取り、スパーダが一人で奥のほうのテーブルに座ろうとする。

――だが……

「あっ、兄さん僕も一緒に食べて良いですか？」

エリオはスパーダの後について行った。

「おいエリオ、食べる時は一人にしてくれ」

「ここに座りますね」

まるで聞こえませんと言った体でスパーダと同じテーブルに座るエリオ。

「……良い性格してるなお前」

「ありがとうございます！」

「キュイー」

元気良く返事をするエリオとフリードにスパーダは頭を抱えるような仕草をとる。

「……誉めてない」

淡々と会話をするスパーダ達だがそれに反し周りの人々は驚いていた。

「どういう事だ？」

「さっ…さぁ？」

「びっくりですぅ！」

「スパーダさんとエリオが一緒に食べてる」

「馬鹿、そこじゃねぇよ！」

そう、そこではない。彼女達にとってそれより大事なことが起こっていた。

「スパーダ特務官がエリオのこと名前で呼んでる」

「昨日はきっぱり断られたのに」

そうやって驚いている間にエリオが食べ終わり、食器を片づけると瞳を輝かせながらスパーダに駆け寄る。

「ごちそうさまでした。じゃあ兄さん、訓練宜しくお願いします」

「誰が今からやるって言った。今晩具体的な説明をして、実際やるのは明日からだ。それに折角の休憩時間だ、子供は子供らしく遊んで来い」

「わかりました。じゃあフリードと休憩してきます」

そう言ってエリオは元気良く食堂から離れて行った。

「ねぇ、スパーダ」

余程気になったのか、真っ先にフェイトがスパーダに近付き尋ねる。

「何だ、テスタロッサ執務官？」

「……私、厳密にはハラオウンなんだけど？」

普段のフェイトなら気にしない所だがエリオだけ名前で呼んでいるという事実に気が障ったのか、声が少し怒っている。

「知るか、そんな呼び難い名前はクロノだけで十分だ」

「……エリオと何かあったの？」

「何かあったどころじゃ無いぞ。そういえば、エリオの親代わりはお前だったな、全くどういう育て方しているんだ？」

スパーダは質問をして来たフェイトに逆にイラつきながら質問を返す。

「訓練ってどういうこと？」

「槍の戦い方を教えるだけだ」

「お前槍なんて使えるのかよ？」

「お前は馬鹿か？使えるから教えられるんだよ」

「んだと、てめぇ！！」

ヴィータがスパーダに迫るが、はやてが止めに入った。

「止めやヴィータ。スパーダ君そないに剣と槍だと違うん？」

「当たり前だ。戦いでの役割、概念、筋肉の使い方まで違う」

「何で教える気になったの？」

「別に、あのままだとエリオの武器が不憫だと思ったからだ」
「ストラーダのことか？」
「他に何がある」
どんどん話が脱線していったが……
「エリオを名前で呼んでるのは？」
再びフェイトが彼女にとっての本題に入る。
「……一々答える気は無い」
そう言いながら、スパーダはタバコを取り出すと……
「ちょっ、ちょい待ちや。スパーダ君！」
慌ててはやてがそれを阻止しようとする。
「何だ？食堂は禁煙では無い筈だ」
「いや、違くて」
「ああ、もしかして食事時は禁煙になるのか？」
「だからそうやなくて。スパーダ君、今いくつ？」
「１９だ」

書類、見てないのか？と怪訝な顔をするスパーダ。
「それは知っとる、だから言うてるんや。お酒とタバコは２０歳からや！」
「１９も２０も変わらないだろう？」
法の守護者とは思えない発言をするスパーダ。
「大ありや！しかも、ウチらは管理局なんやで！」
法を守る管理局の人間が白昼堂々法を破っていたら洒落にならんとスパーダからタバコを取り上げようとする。
「わかった、わかった。じゃあ、お前たちの前で吸うのは止めるさ」
そう言ってスパーダは食堂をあとにした。
「何なんだ、あいつ！エリオだけ名前で呼びやがって！」
食堂を去るスパーダの後ろ姿を見て悪態をつくヴィータ。
「あらヴィータちゃん妬いてるの？」
「んなわけねぇだろ！！」
「でもびっくりだねティア。スパーダさんとエリオが仲良くなってて」

「あれは仲が良いっていうのかしら？」

「ちょっとエリオ君が羨ましいです」

「……キャロ」

少し寂しそうにそう言ったキャロをフェイトは不安そうに見つめる。

～聖王教会～

ここは聖王教会、管理局と同じく危険なロストロギアの調査と保守を使命としている宗教団体で宗教自体を指す時は「聖王教」と呼ばれる。本部はベルカ自治領内にあり、周辺の景観が良い事から観光地としても有名で、若者の結婚式場としても人気である。

「……分かりました。では新たな反応が有りましたらご連絡下さい」

通信を切った金髪長髪の女性はカリム・グラシア。聖王教会に所属する騎士である。

ピッ

「ロストロギアですか、騎士カリム？」

「えぇシスターシャッハ、危険性は無いのだけど何があるか分から無いし、反応があった世界を考えるとはやて達に頼もうかしら」

こちらの短髪の女性はシャッハ・ヌエラ。聖王教会のシスターであり、カリムの秘書をしている。

二人の見た目と能力を考えれば、肩書きが逆な気もするが気にしてはいけない。

「機動六課ですね、彼もいますし」

彼、その単語にカリムの顔が少しばかり赤くなる。

「元気かしら？」

「会えなくて元気が無いのは騎士カリムの方では？」

カリムを茶化しながら言うシャッハ。

「からかわないでよ、シャッハ！」

「しかし、嘘では無いでしょう？」

そう言われて、カリムの顔が更に赤くなる。

「もぅ……／／／」

気を取り直したカリムの持っている報告書にはこう書かれていた。

ロストロギア反応場所

第９７管理外世界“地球”

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0415t/

---

リリカルなのはStrikerS〜罪を背負いし者〜

2011年12月16日01時45分発行